

同窓生 シリーズ

61



24回生 酒井邦彦

さか いくに ひこ

◆プロフィール

最高検察庁 検事

昭和54年4月 東京地検検事。
平成2年7月 在アメリカ合衆
国日本国大使館一等書記官。6
年4月 東京地検検事。10年7
月 法務大臣官房参事官。12年
7月 東京地方検察庁公安部副
部長。14年4月 国連アジア極
東犯罪防止研究所所長。17年
7月 東京高等検察庁公判部長
18年7月 最高検察庁検事

裁判員制度―DNA―新宿高校

私は、現在最高検察庁の検事で、平成19年5月までに始まる裁判員制度の準備をしています。この制度は、選挙人名簿から抽選で無作為に選ばれた国民が裁判官と一緒に、殺人等の重大事件について、審理をして判決をするものです。裁判官3名と抽選で選ばれた裁判員6名が対等の立場で同じ一票を持つて多数決により、被告人が有罪か無罪か、有罪の場合には、死刑、無期懲役、懲役何年が相当かを決めるのです。そう、皆さんが、秋田の連続児童殺人事件の審理をして判決を出すと考えていただければよいでしょう。もちろん、私たち検事も、証拠に工夫をしたり、ビジュアルプレゼンテーションを駆使したりして、分かり易い裁判を行うよう努力しますが、それでも国民の方々には大きな負担をお願いすることになるわけです。多くの方は事の重大性に気付いていませんが、日本にとって革命的といっているほどの大改革です。アンケートの結果によれば、自信がない、仕事が忙しいなどの理由で、裁判に

参加したくないという人が過半数を占めており、私も頭を悩ませています。ところで、参加したくない理由の一つに、裁判などは専門家に任せておけばいいというものがありますが、これは、日本では、豊臣秀吉の刀狩以来、一般国民は、統治の客体として位置付けられてきたことと関係があり、この「お上」思想が、国民のDNAに深く刻み込まれているといわれています。しかし、21世紀の日本は、国民の一人一人が自分の国や社会のありかたを考え、決め、参画していく、創造的で活力ある社会でなくてはなりません。そのためには、意識の大転換が必要になります。裁判員制度が、そのきっかけになればと願っています。

ところで、統治の客体意識が日本人のDNAだとすると、新宿高校生のDNAはなんでしようか。「自由でのんびりしており、庶民的だけど品が良く、好奇心は強いけどすごい冒険はしない」というところですか。このようなDNAは、新宿高校の所在地、生徒の居住地とか、歴代の先生とか、伝統とか長年にわたって築き上げられたいろいろな要素から形

づくられてくるので、都立高校を巡る様々な制度の変更に関わらず新宿高校で学んだ者に等しく存在しているものでしょう。かく言う私も、そのようなDNAを持つていると自覚しています。いくら久しぶりに高校の同級生に会っても、全く違和感がないのも、お互い新宿高校で培った共通のDNAのなせる業でしょう。私は、そのような新宿高校の卒業生が、法律家、特に検事を目指していただけるとうれいのです。いい法律家になれると思いますので、どんどんチャレンジしてください。

最後に、私自身のことには手短に触れたいと思います。私は、昭和54年に東京地検の検事になり、以来27年以上検事を続けています。その間、ロス疑惑事件、金丸脱税事件、日本赤軍事件、北朝鮮の拉致疑惑事件等いろいろな事件の捜査や裁判に携わったり、外交官として在アメリカ日本大使館に勤務したり、また、国連で犯罪防止の仕事をしていました。そして、現在は、冒頭で述べたように裁判員制度の準備をしています。このような多様な仕事をさせていたいただいているのも、新宿高校生のDNAである好奇心の強さのおかげではないかと思っています。高校時代は硬式テニス部に所属していましたが、その後も大学生、社会人と続けており、おとしは、法律家No.1になり、また、全国大会でベスト16にもなりました。一度是非、新宿高校のテニス部の皆様とお手合わせをしたいと思っています。また、マラソン、サッカー等スポーツは何でも好きで、年甲斐もなくやるものですから、周りからは怪我するぞとか(本当に膝の半月板を痛めました。)、長生きしないなどとおどされていますが、そのような意見はできるだけ無視するようにしています。そう、頑固なのも新宿高校生のDNAの一つですね。

編集後記

編集作業を通して学校がぐんと身近に感じられるようになりました。原稿依頼に快く応じて下さった先生、生徒の皆さん。そして高山先生、恵雅堂の吉田さん。本当にありがとうございました。

2年広報一同

R100

古紙配合率100%
白色度80%再生紙を使用しています

PRINTED WITH
SOY INK